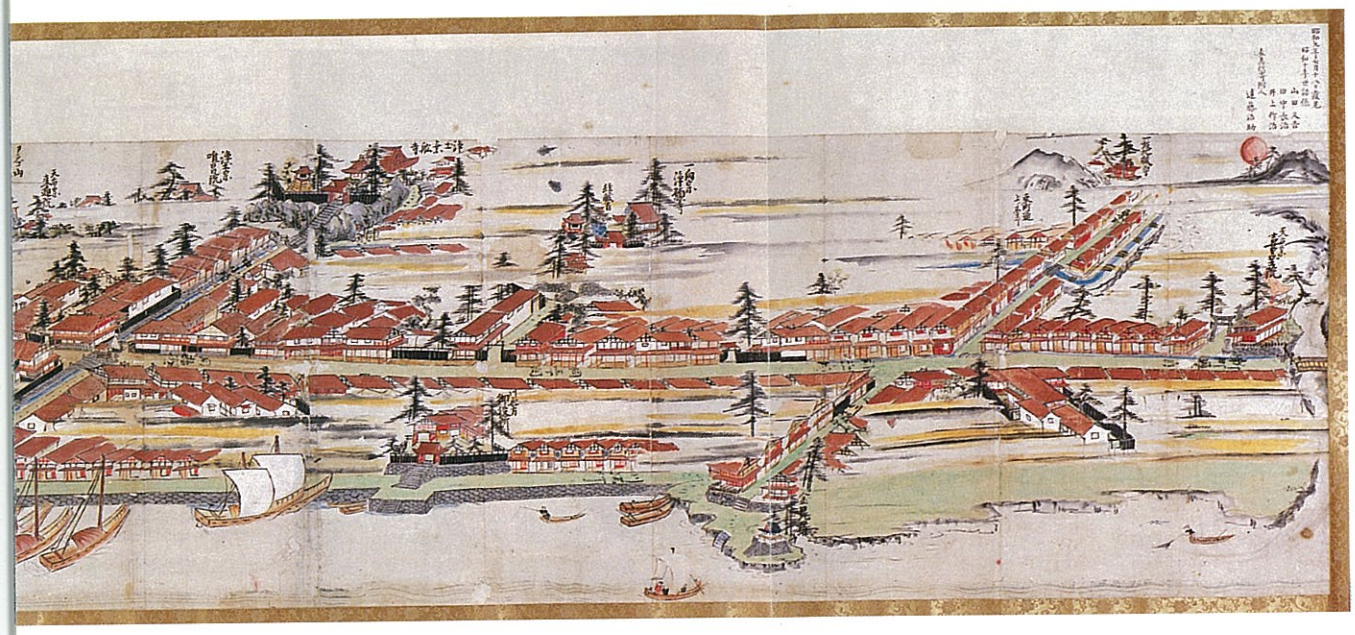
よみがえった大石田河岸

大石田地区河川環境整備事業



大石田河岸絵図（東町地区所蔵　町指定文化財）

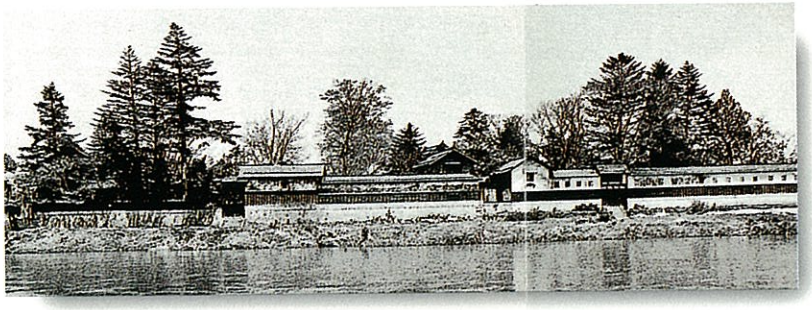
大石田河岸

大石田河岸が始まったのは、室町時代の頃からと言われております。

寛永の頃には、延沢銀山と尾花沢、大石田が徳川幕府直轄領となり、最上川による輸送が一段と活発になって、大石田の河岸の役割が重要になりました。

当時、江戸、大阪に向かう客は、五月から八月の間だけで、三六〇〇余人を数え、物資の輸送においては、酒田を経て直接、京都、大阪方面との取引が行われました。

これに伴って、大石田には上方文化が直接入ってきたので、酒田と共に、賑やかな土地であったと言われてお



大石田川舟役所跡地

大石田の舟運が栄えた頃の河岸舟着場。（昭和三十年代撮影）

川舟鑑札

ります。

元禄時代、最上川に就航していた舟は、大石田舟約二九〇艘、酒田舟約二五〇艘で、その積出し米は、年間二四万俵を数え、六〇〇有余の舟が毎日最上川を上下する様相は、まさに壮観と言えました。

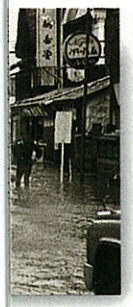
大石田には、寛政四年（西暦一七九二年）に徳川幕府が管理する舟役所がおかれました。

最上川で舟を所有するには、この鑑札が必要でした。

大石田大橋下流側

――川とのふれあいを求めて

最上川舟運の中枢として明治時代まで隆盛をきわめてきた大石田には、今も町並みの中に蔵造りの店舗など、当時の面影が色濃く残されています。



洪水のつめあと

昭和四十二年八月、最上川の氾濫により大石田町市街地は一面濁流に呑まれました。

しかし、たびかさなる最上川の洪水で、堤防の整備に迫られ、洪水から町を守るために昭和四十年から十四年の歳月をかけ、左右岸合わせて約二一〇〇mの特殊堤防を整備しました。

このため、町並みと最上川は、堤防により切り離され、川とのふれあいが出来ない状態になっていました。

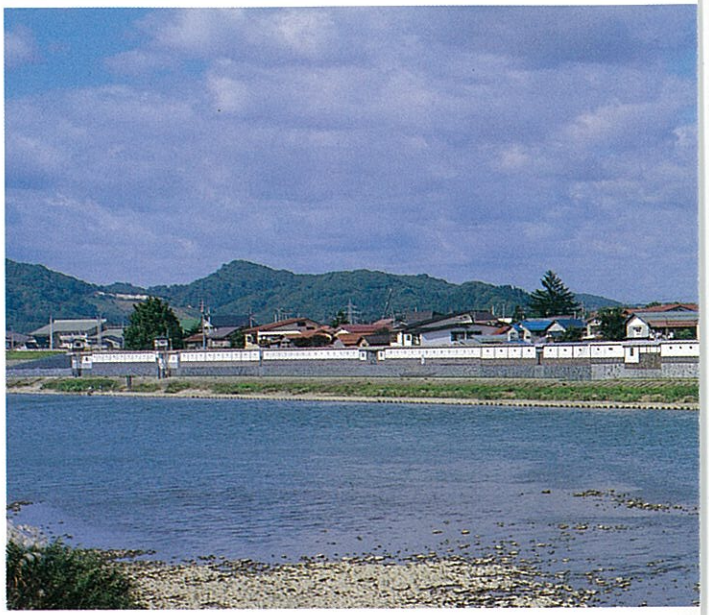
平成二年二月九日に開催された「大石田町と最上川を語る会」の中で、「最上川を介して栄えた町と川とのつながりを何とか再生できないか」と大石田町民の方から提案がありました。そこで、平成三年度から平成七年度にかけて、大石田大橋下流右岸側の特殊堤防の（延長六百二・四メートル）景観整備を「河川環境整備事業」の中で

大石田特殊堤

洪水から家屋を守るため、大石田地区では土地の事情から、コンクリートの特殊堤を整備しました。

将来こうあってほしい河岸

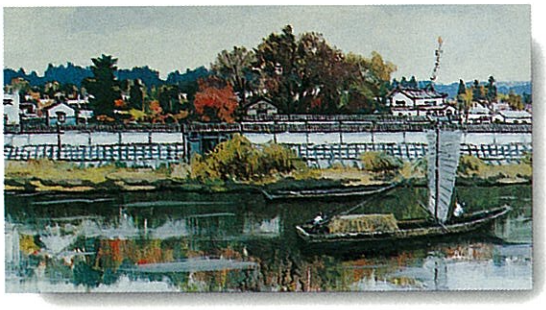
「大石田町と最上川を語る会」で画家の森俊悦先生（示現会会員）が提案し、



約一億六千万円の工事費を投じて行ってきました。

最上川に映える白壁の塀蔵は舟運華やかなころの面影をしのばせております。

この堤防壁画を世界に知ってもらおうと大石田町では「世界最長の壁画」としてギネス社に申請しています。



施工指導しました

舟運の歴史

最上川は、鉄道がしかれるまで物資輸送の大動脈でした。

九〇一年～九二二年頃（延喜年間）一一〇〇年くらい前

○ 野後（のじり）（今の駒籠）に馬三匹、舟五隻を常備、野後は東山道の水駅でした。

一五八〇年（天正八年）

○ 碁点・三ヶ瀬・隼の難所を開削。

最上川が山形のほうから酒田まで通る道として整備されたのは、最上義光が山形から庄内までを支配するようになったあたりからです。

一五九六年（慶長元年）

○ 大石田に乗船寺が建立され、川岸の町大石田の整備が行われたようです。

ひらた舟

平たい長い舟で、舳先（へさき）（前の先端のほう）が平になっています。中央に苫（とま）小屋があって、いろりや鍋・釜・舟だんすなど舟の上で生活できるように必要なものが備えられていました。

●ひらた舟の活躍

ひらた舟は、平安時代から江戸時代にわたって、川舟の主体になっていました。

大石田では、元禄時代（一七〇三）に約三〇〇隻近いひらた舟がありました。

ひらた舟は、長さ約一八～二四m幅約一・八～二・七mあり、米の積載量は二〇〇～三五〇俵でした。

一六一四年（慶長一九年）

○最上義光が、清水（今の大蔵村）を攻め滅ぼし、舟継権を清水から大石田に移しました。

一六五〇年（慶安三年）

○大石田舟は、酒田に下り荷を運び、酒田舟は、大石田の上り荷を運ぶというきまりができました。

一七九二年（寛政四年）

○大石田に幕府の川舟役所がおかれました。

一八七二年（明治五年）

○川舟役所が廃止になりました。

一九〇四年（明治三七年）

○奥羽本線全線開通。（大石田までは明治三四年開通）

大正三年には、陸羽西線が開通。最上川の水の道は、こうして陸の運送に移り、幕を閉じることになりました。

●舟で運ばれた主なもの

下り舟（大石田から運んだもの）

・米・紅花・あおそ・真綿・蝋・漆・えごま油
・葉たばこ・大小豆など雑穀

上り舟（酒田から運んだもの）

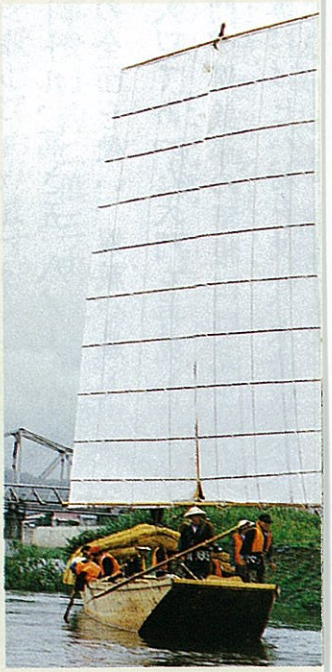
・塩・茶・砂糖・海産物（いさば、にしん など）
・ふるて・木綿

●使われた舟

○最上川を上り下りした舟は、ひらた舟と小鵜飼舟です。

●最上川を上り～下りに要した日数

大石田～酒田　下り　4日～5日
　　上り　14日～15日



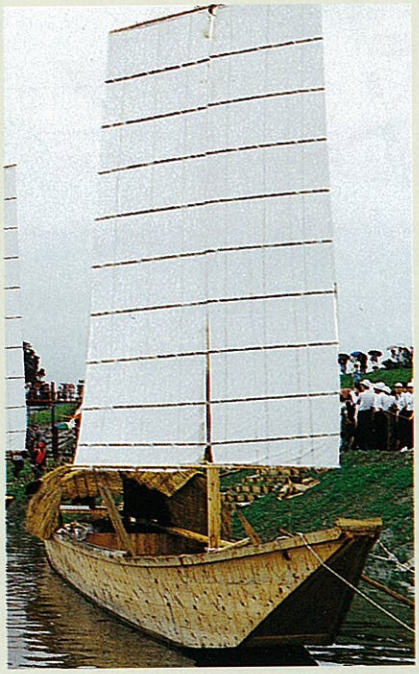
小鵜飼舟

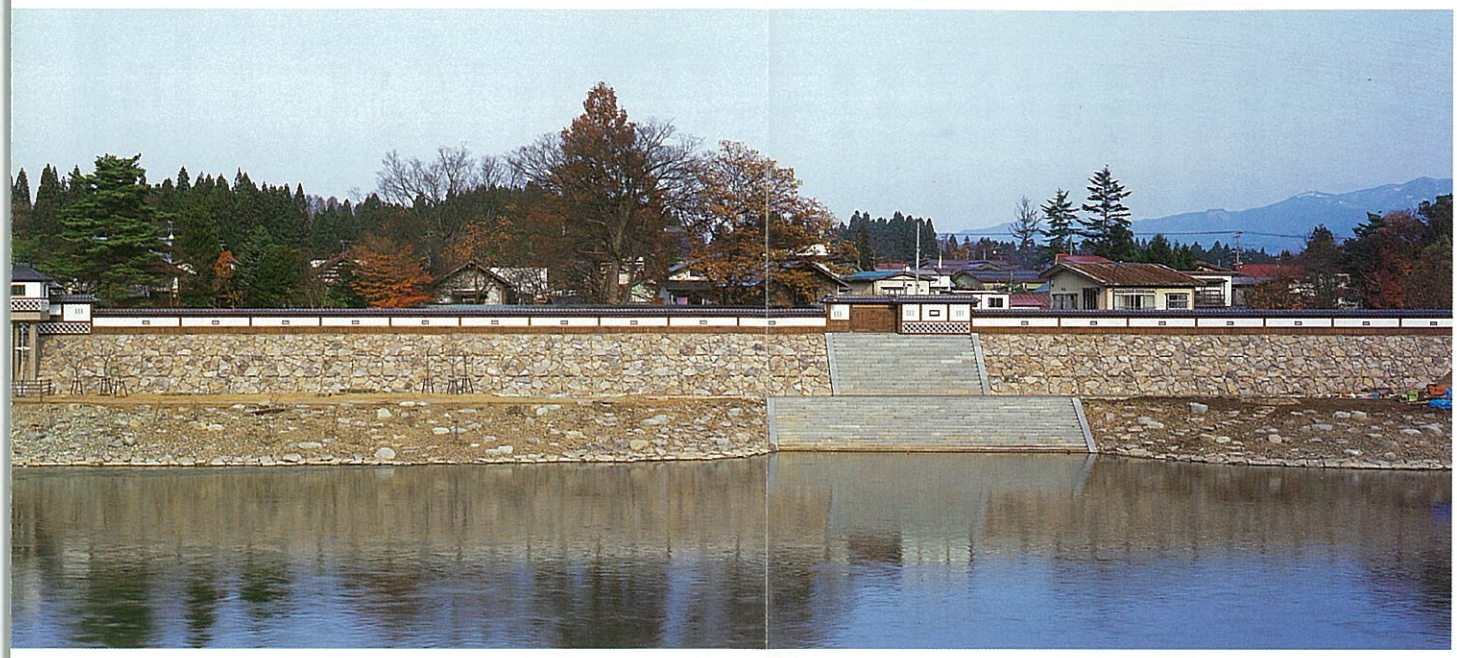
江戸時代になって、一六九〇年代（元禄年間）の頃になり、米沢上杉藩で、この型の舟を使うようになりました。

この舟は、ひらた舟より幅が狭く、小型であり、荷物を多く積むことができませんが、舳先がとがっていて、舟脚が速く、小廻りがよいなどのことから、最上川上流（左沢より上流の地域）で用いられていました。

この舟が、大石田川岸で輸送用として使われるようになったのは、川舟役所が廃止された明治五年（一八七二年）の後です。

小鵜飼舟は、長さ約一五m～一六m、幅約一・八m～二m位あり明治中期には、さらに大きくなってひらた舟の小舟位のものが浮かぶようになりました。





大石田大橋上流側

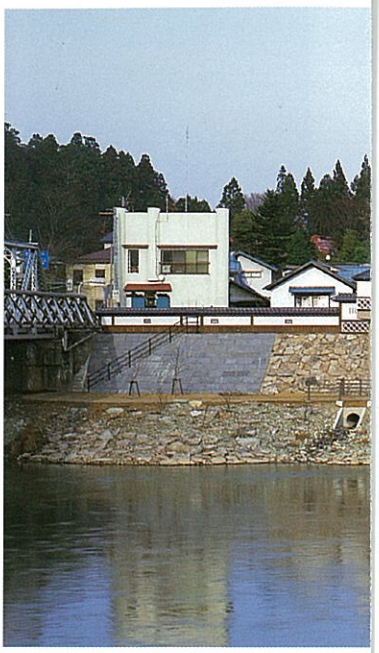
――よみがえった大門

大石田大橋上流右岸側の景観整備は、平成七年から平成八年にかけて行いました。延長百五十一・六メートル、高さ五・八メートルのコンクリート堤防の全面を使い、塀蔵や最上川から舟役所等への出入口であった大門を再現しております。

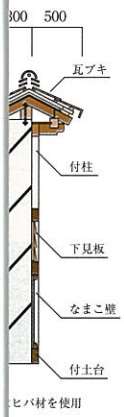
大門、塀蔵部の屋根には瓦を、桁、柱、腰板、土台等にはヒバ材を使い、木造建築により再現し、護岸には安山岩、階段部には花崗岩を使い、景観の向上に配慮しました。

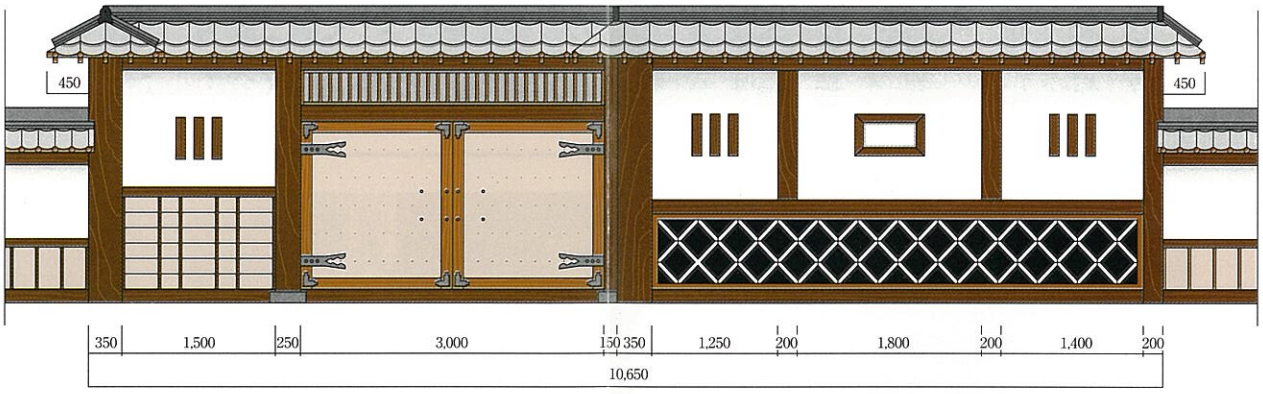
工事費は約二億三千万円を投じております。

皆さんが最上川と親しめるように、散策路やベンチを整備し、皆さんのいこいの場所や観光スポットとしてまちづくりの支援になればと思っております。



大門正面図


300
500
瓦ブキ
付柱
下見板
なまこ壁
付土台
ヒバ材を使用


450
450
350
1,500
250
3,000
150
350
1,250
200
1,800
200
1,400
200
10,650

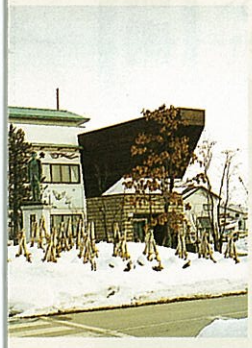
大石田町の紹介

母なる川　最上川とともに生きてきた大石田町は、かつて舟運の中心港として栄え、松尾芭蕉・正岡子規・齋藤茂吉ら最上川に魅せられた文人墨客が数多く訪れた歴史と文化に育まれた町です。

白壁の舟役所を再現した桂桜公園、小鵜飼舟二隻を意匠した舟運の殿堂クロスカルチャープラザ、大石田温泉あったまりランド深堀、塀蔵をイメージした特殊堤修

光寺境内裏庭〉

石田を訪れ、土地の俳
みだれ歌仙」を巻きま
つめてはやし最上川」
れたものです。



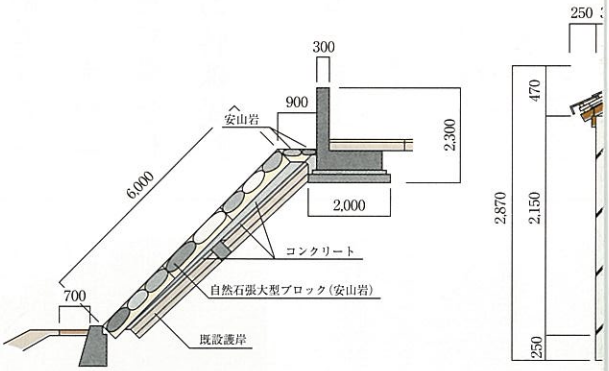
〈あったまりランド深堀〉

約50畳の浴室でゆったりと温泉を楽しめる、自慢の湯船。季節の流れを肌で感じられる露天風呂。そして打たせ湯、サウナ、ジェットバスなど、充実した施設がいっぱいです。

〈クロスカルチャープラザ〉

舟運で活躍した小鵜飼船二隻を意匠しているクロスカルチャープラザ。1階には、職人文化の資料展示室が、2階には大勢の方々にコミュニティの場として利用して頂く「ふれあいホール」があります。また、船尾の多目的コートは、軽スポーツ等にご利用頂けます。

構造図



（単位：mm）

景など江戸時代の風情をかもしだしています。さらに、山菜・きのこ・川魚の宝庫で大石田町は天然の味がいつも満載。特に手打ちそばは全国的に有名。

これからも自然を大切にし、舟運文化にこだわった個性ある町づくりを推めていきます。

〈大石田まつり〉

伝統ある夏の風物詩「大石田まつり」のクライマックスは、最上川河畔を舞台とした花火大会です。2,000数百発に及ぶ花火のフィナーレは、日本一といわれる「2尺玉3連発」が夜空を焦がして、数万人の観客の歓声がゆく夏を惜しむかのように流れていきます。

〈最上川紅花ライン舟下り〉

かつて、最上川舟運の中心河港として栄えた時代、このルートを経て数々の京文化がこの地に運ばれ、そしてこの地から紅花や米が荷積みされて酒田へと下って行きました。

大石田町～尾花沢市毒沢間を航行

航行距離　17.5km（最上川では最長）

航行時間　約70分

〈カヌーマラソン〉

毎年7月の第1日曜日は、大石田をスタート地点とする最上川カヌーマラソンが開催されます。全国からカヌーイストが集まり、港は若者たちの熱気で溢れ、ゴールとなる戸沢村蔵岡までの42.195kmはアドベンチャーたちの興奮に包まれます。

〈ギフチョウ・ヒメギフチョウ〉

“春の女神”ギフチョウ、ヒメギフチョウは、町指定の天然記念物です。

〈手打ちそば〉

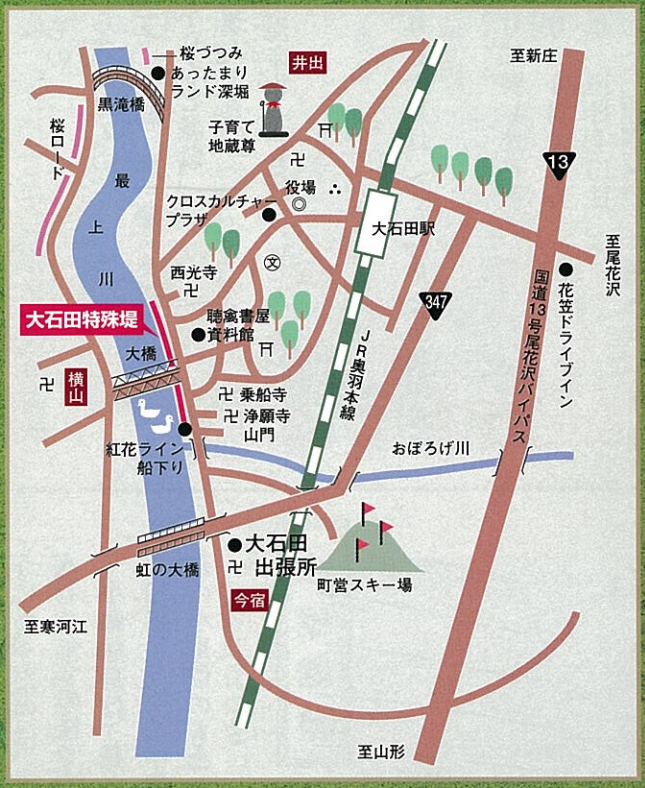
大石田町は全国有数の「そばの里」。来迎寺そば、次年子そばはおいしいそばの代名詞になっています。

〈聴禽書屋〉

齋藤茂吉が昭和21年2月～翌年11月まで起居した住まい。この名は、庭内の木立を鳴きわたる小鳥の声に因み、自ら命名しました。この一室で歌集「白き山」は誕生しました。

〈芭蕉句碑・西

元禄2年、芭蕉は大
人高野一栄らと「さ
した。「五月雨をあ
の句は、その時詠ま



～川に関する要望等がありましたら連絡下さい～

■ 建設省東北地方建設局新庄工事事務所

〒996-0071 山形県新庄市小田島町5-55
TEL.0233-22-0251
FAX.0233-23-7351
http://www.th.moc.go.jp/shinjyou

■ 大石田出張所

〒999-4113 山形県北村山郡大石田町
大字今宿字鷺の原466-2
TEL.0237-35-2024